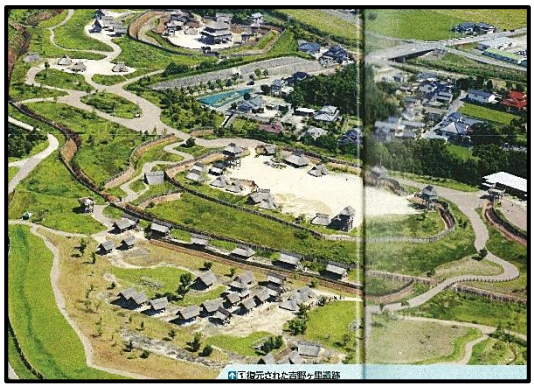
岡崎市立六ツ美南部小学校　授業研究②　　令和３年　６月　３日

対話でつなぐ授業　～自己肯定感を高めて～

岩瀬　竜弥

指導員訪問②　６年　社会科
「縄文のむらから古墳のくにへ」　柴田　惇志　教諭



縄文から弥生へ、狩猟・採集から農耕の生活へ。六ツ美学区も田植えを終え、田園風景が広がります。私も大嘗祭の歴史を学ぶことで、先人たちのたゆまぬ努力によって百年以上続く「悠紀斎田お田植えまつり」を学区民と共に子供たちがこれからも受け継ぐ意味を知りました。遠い弥生時代に、米作りの広がりがもたらした変化は何か、村同士の争いは必要であったのか。何が幸せだったのでしょうか。

柴田教諭は、子供たちに「未来は明るい」ことを常日頃から語ってきました。小学生の時からリーダーや代表委員など新しいことにチャレンジ。様々な経験の中から、仲間とかかわり合う時間を大切にすることを教育の柱に。子供たちがこの単元を通して、持続可能な社会の担い手として共に協力した生き方をしてほしいと願いました。

本時では、村同士で争う理由を予想し、グループ対話へ。「人口の増加で食料が足りないのでは」「土地の拡大が必要になったのでは」と発言が続く中で、教科書、資料集で一人調べです。クラス対話では、争いがＴ１●「Ⓐ必要、Ⓑ必要ない」のどちらかの立場かを聞き、立ち止まりました。記録のように、Ⓐ「仲よくしても意味がない」、Ⓑ「平等」「困っているところに分ければ」とそれぞれの立場で白熱した議論が。Ｃ６「食べ物は貴重」から、核心部分のＣ15「生きるため」に、子供同士がつなげ、さらに掘り下げられるか、教師の出●について、学年協議でも多くの代案が出されました。

Ｃ18「平和」・・現代に通じるもの。最後までⒷを貫き通す子も。幸せとは何か。この子たちが歴史から学び、次の社会を支えますね。

＜授業記録より一部抜粋、編集＞

Ｔ１：●手を挙げて。戦いって必要なの？命かけてるでしょう。(矢じりの刺さった人骨)
Ｃ２：Ⓐ必要＝８人、Ⓑ必要ない＝２０人
Ｃ３：Ⓑ村同士で仲良くなって、食料を分け合って、争いはやめたい。それか、村同士をつなげる。一緒にする。平等になるし、こういう、争い事はなくなると思う。
Ｃ４：ⒶＣ3 とは逆。仲よくして村同士が重なっても、食料がある村に分けたら、すぐなくなって、また争う。違う村を襲う。仲よくしても意味がない。だったら、争って勝った人だけが生きれば。命かけて。
Ｃ５：Ⓑ必要じゃないと思って、食料がある村と同盟結んだら戦う必要ない。困っているところに分ければいいと思う。
Ｃ６：ⒶＣ5 とは逆の発想で、食べ物は貴重なもの。いっぱいあっても、いっぱい食べるからすぐになくなる。争いがあって、勝った方が食べればよい。
―＜略＞―
Ｔ14：●これだけ（食料）を求めて戦った？
Ｃ15：食料だけでなく、生きるために戦う。
Ｃ16：強い力がほしかった。
Ｃ17：村自体が欲しかった。
Ｃ18：食料と生きるためもあるけど、平和もある。領地拡大で攻めて来ないから。